

仏を超えた信長

- 安土城惣見寺本堂の復元 -

To Surpass Even the Buddha: A study on the reconstruction of the main hall of Soukenji-temple in Azuchijo-castle by Oda Nobunaga

岡垣 頼和・浅川 滋男

OKAGAKI Yorikazu, ASAKAWA Shigeo

和文要旨：織田信長が創建した安土城惣見寺は、16世紀後期の安土城築城の際、近隣より本堂を移築し、その2階に「盆山」を祀った寺院である。創建当初は真言宗の寺院であったが、17世紀中期に臨済宗に改宗した。19世紀中期には火災に遭い、三重塔と仁王門など一部の堂塔を残してほぼ全焼してしまう。本稿は、その火災で廃墟と化した惣見寺本堂を復元しようとする試みである。惣見寺本堂にかかわる文献・絵図史料はきわめて少なく、復元のための基礎的操作は遺構そのものの分析以外では、類例仏堂からの構造・細部の引用に頼らざるをえない。本稿では移築前をA期、創建当初をB期、改宗後をC期に時期区分し、各時期の意匠と構造を復元する。

【キーワード】安土城、惣見寺、本堂、織田信長、盆山、中世仏堂、復元

Abstract : The temple complex was built by Oda Nobunaga in the latter half of the 16th century. During this time, the main hall of the temple was moved to the castle from the surrounding area, and the stone symbol of Nobunaga, called *Bonsan* was enshrined on the second floor of the main hall. The Soukenji-temple originally belonged to the Shin-gon sect of Buddhism, but was converted to the Rinzai sect in the middle term of the 17th century. In the middle term of 19th century, Soukenji was almost completely destroyed by fire; only a few buildings such as the three-storied pagoda and the Nio-mon gate remained. Using the few remaining historical documents and pictures, and by analyzing the ruins of the main hall, we attempt to provide a reconstruction of Soukenji as it was before the fire. Data from neighboring Buddhist structures of the same period was also used in the reconstruction. We defined three stages in the transition of the Soukenji main hall; Stage A, before being moved to the castle grounds, Stage B, the re-erection by Nobunaga's conversion to the Rinzai sect.

【Keywords】Azuchijo-castle, Soukenji-temple, Main hall, Oda Nobunaga, Stone symbol (*Bonsan*)
Buddhist halls in medieval age

1. はじめに

1-1 研究の背景と目的

織田信長が築いた安土城の山麓に「惣見寺」という寺院があった。中世城郭の場合、郭の一角に持仏堂や戦死武将を慰霊する祠堂などを設ける例は各地に知られているが、惣見寺のように城山の主要部に大伽藍を設けるのは異例である。異例であるのは、信長が天下人であった

が故であろうが、残念なことに、今は三重塔と仁王門を残して境内に堂宇はみあたらない。本能寺の変の直後に安土城は焼け落ちたけれども、惣見寺は焼き討ちや類焼を逃れた。しかし、19世紀中ごろ火災に遭い、伽藍の中樞は灰燼に帰した。

いま惣見寺の跡地を訪れると、本堂跡の基壇の向こうに西ノ湖を望める。近年、「近江八幡の水郷」の一部と

して重要文化的景観に選定された西ノ湖を俯瞰できるこの場所は、まさに近江を代表する名勝地の一つである。基壇の上には、かつて柱が立っていた位置を示す礎石が規則性をもって並んでいる。かつては、基壇上にどんな建物が建っていたのか、だれも知る由はない。よく知られているように、安土城本体については、これまで宮上茂隆や内藤晶が復元に取り組んできたが、不思議なことに、摠見寺の建築に関する復元的な研究の蓄積はまったくない。

ところで、大火に見舞われたとはいえ、摠見寺は法灯を絶やしたわけではない。徳川家康の屋敷があったとされる山麓の一画に仮の本堂を建て、臨済宗の古刹として威厳ある姿を今も誇示しているが、同寺の「摠見寺本堂跡地に本堂を復元したい」という要請に、滋賀県立大学が、2008年に「安土城・摠見寺再建学生設計競技」を主催することになった。鳥取環境大学浅川研究室からも、岡垣頼和が設計競技(コンペ)に参加し、優秀賞(全国2位)を得た。しかし、同年11月のコンペ審査時点では復元に関する考察が十分なされていないとは言えず、その後、岡垣は卒業研究として摠見寺本堂の変遷と復元に関する考察を深化させていった。ここに発表する論文は、コンペ審査時点から大きく進展した復元研究の成果である。

1-2 摠見寺の歴史

(1) 盆山を祀る寺

摠見寺は城下町の百々橋口道が城山に入り込んで天守閣に至る安土山の中腹に造営された。太田牛一の『信長公記』巻十四¹⁾には、

(天正九年)七月十五日、安土御殿主、并に惣見寺に挑灯余多つらせられ(後略)

とあることから、天正9年(1581)以前の竣工であることが知られる。さらに厳密に言うならば、安土築城が始まった天正4年(1576)以前に寺の建設が遡るとは思われないので、造営期間は1576~81年の5年以内ということになる。これほどの短期間で伽藍を完成しえたのは、後述するように、境内堂塔のほぼすべてを近隣から移築したからであろう。

「安土山摠見寺旧写記」(1912)によれば、安土城竣工時の住職は亮照法印なる人物で、信長が小牧城在城時に屋敷を拝領し、その後、信長とともに安土へ移ったという²⁾。亮照法印は真言宗の僧侶であり、創建当初の摠見寺は「真言宗の寺院」ということになるが、信長が真言宗を信仰したというよりも、敵対する天台宗や浄土真宗などの宗派が排除された結果とみるべきだろう。信長にとって重要なものは経典でも本尊でも宗派でもなく、自



図1 安土城主郭部位位置関係図

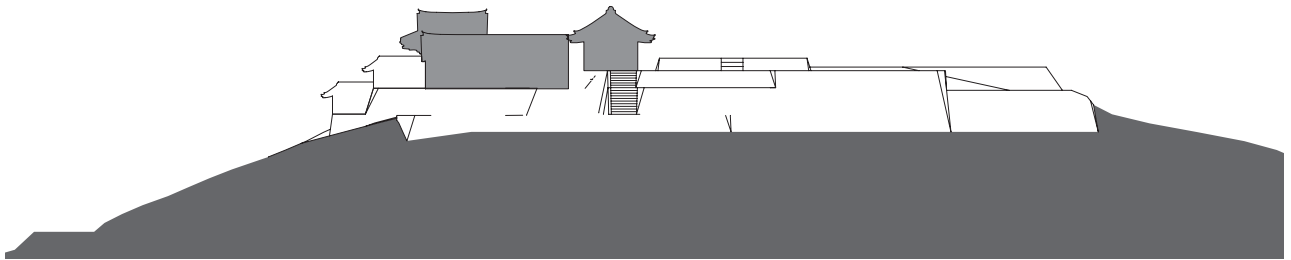


図2 惣見寺境内イメージ立面図

らの分身たる「盆山」だったからである。

ルイス・フロイスの『日本史』第3巻55章³⁾に、惣見寺に関する記述がある。

神々の社には、通常、日本では神体と称する石がある。それは神像の心と実体を意味するが、安土にはそれがなく、信長は、予自らが神体である、と言っていた。しかし矛盾がないように、すなわち彼への礼拝が他の偶像へのそれに劣ることがないように、ある人物が、それにふさわしい盆山と称せられる一個の石を持参した際、彼は寺院の一番高いところ、すべての仏の上に、一種の安置所、ないし窓のない仏龕を作り、そこにその石を収納するように命じた。

信長は「盆山」というご神体を自らの化身として、本堂ご本尊の上に「仏龕」を造って祀ったとフロイスは書き残しているのである。仏像の上層に自らの化身を祀るという行為は、比叡山や本願寺を壊滅的状况に追い込み、中世宗教社会を解体した信長の思想を露骨にあらわすものと言える。さらに、境内の立地に目を向けると、最も背の高い三重塔を本堂よりも低い隣接地に配し、「盆山」を安置する本堂の2階から見下ろせるようレイアウトしていた。以上のような伽藍内部の空間設計を通して、信長は己が「仏を超えた存在」であることを誇示しようしたのであろう(図2)。

さて、フロイスのいう「仏龕」とは何なのであろうか。「龕」とは、洞穴の壁面や厚い石壁をくりぬいた棚状の施設をさす。そこに仏像を鎮座させれば、その棚は「仏龕」となるわけで、東アジア圏においては石窟寺院内の「仏龕」がよく知られている。惣見寺本堂に、石窟寺院のような「仏龕」があったはずはなく、本尊の真上に造られた小型の2階部分(楼閣)を「仏龕」に喩えたのであろう。それはおそらく「厨子」に似た施設であり、常時扉を開いており、境内の地面から直接盆山を遙拝できたのではないだろうか。

『信長公記』巻十五⁴⁾に以下の一文がある。

正月朔日、隣国の大名・小名御連枝の御衆、各在安土候て、御出仕あり。百々の橋より惣見寺へ御上りなされ(後略)

このように、隣国の大名・小名はみな惣見寺を経由し天守に出仕たとされるが、それは「盆山」の遙拝を義務づけたものと解釈できる。また、フロイスの『日本史』第3巻55章⁵⁾には、信長が「庶民」に対しても惣見寺に関する御触書を出し、信長の誕生日を「聖日」と定め、惣見寺を参詣するよう指示したことが記してある。町民が安土城天守閣で信長にお目通りすることはかなわないが、その代わりに惣見寺で信長の化身たる盆山を礼拝せ

N

図3 安土城旧摠見寺境内敷地全体図

よ、という意図であろう。こうしてみると、摠見寺そのものが織田信長という権力者の代替物として機能していたことがわかる。

(2) 伽藍の変遷

安土山中腹の境内に現存する三重塔と仁王門（ともに重要文化財）は、それぞれ享徳3年（1454）と元龜2年（1571）の建立であり、いずれも安土城天守閣より古い中世和様の建造物である。寛政3年（1791）の「境内坪数並建物明細書」によると、創建当初の境内を構成した本堂、仁王門、三重塔、拝殿、鎮守社、鐘楼堂のほとんどが安土城近隣の寺社から移築されたという⁶⁾。

天正10年（1582）、信長は天下布武を目前に「本能寺の変」により命を落とし、ほぼ時を同じくして安土城も灰燼に帰した。そのとき摠見寺は天守崩落の類焼を免れた。信長の死後も秀吉や家康によって寺領を安堵され、信長の菩提寺として年忌法要が営まれていた。明治年間の取調書によると、寛文8年（1668）に臨済宗に改宗して、妙心寺派の末寺となった。18世紀末の隆盛期には、本堂を始め22棟の堂塔が軒を連ねていたという。しかし嘉永7年（1854）、本堂からの失火により主要堂宇のほとんどを焼失し、本堂も礎石と基壇を残すのみとなった。

本稿では、移築・改修・改宗などの諸要素を総合的に捉え、本堂と伽藍の変遷を以下の3期に分ける（図6）。

A期： 安土城内に本堂を移築する前の時期

B期： 安土城内に本堂を移築し、臨済宗に改宗す

るまでの時期

C期： 臨済宗改宗以後の時期

なお、類焼を免れた三重塔・鐘楼・仁王門・玄関門・庫裏門・裏門のうち、三重塔・仁王門は現在も旧地に現存し（図4・5）、裏門は滋賀県神崎郡能登川町南須田の超光寺、玄関門は同県愛知郡愛知川町長野の光澤寺に移築されている。嘉永7年の火災によって壊滅的なダメージを受けた摠見寺は旧境内での再興を諦め、同年、大手道脇の伝徳川邸跡に仮本堂を建て、現在に至る⁷⁾。

2. 復元の方法

2-1 摠見寺に関する先行研究

上に述べてきたように、安土城摠見寺は信長によって城内に移築建立され、信長が自らの分身である「盆山」を祀った寺院である。このように特異な要素を備える寺院であることから、本堂の建築様式そのものよりも、摠見寺に表現された信長の思想や人物像についての研究がこれまで主流を占め、それは壮大な七重天守閣の復元研究へと昇華されていった。天守閣の発掘調査は昭和15～16年（1940-41）におこなわれた⁸⁾。それから四半世紀を経た昭和51年（1976）に内藤昌、翌52年に宮上茂隆が天守閣復元案を提示する際、摠見寺にあらわれた信長の思想や寺院建立の意図について触れている。内藤は信長が天道思想にもとづいて摠見寺を建立し、庶民信仰をおこしたと解釈している⁹⁾のに対して、宮上は信長の中国



図4 現存する「三重塔」



図5 同左「仁王門」

志向から摠見寺の建立は、「瀟湘八景図」にみる「遠寺晚鐘」の実現化と解釈している¹⁰⁾。また、平成2年(1990)に、秋田裕毅は摠見寺の建立について内藤と同様の解釈を示しており、さらには宣教師の記録と『信長公記』の記載を照らし合わせることで、これまで不明とされていた摠見寺の建立年月日が天正9年(1581)7月15日であることを明らかにしている¹¹⁾。

その後、平成6年(1994)の発掘調査によって摠見寺境内跡の遺構があきらかになると、同8年(1996)に安土城郭調査研究所が遺構の分析から、本堂移築後における堂宇大改修について指摘するとともに、本堂を含め焼失前の境内全域の平面を復元した¹²⁾。そして、平成14年(2002)には、松岡利郎が城郭内の宗教施設に関する研究の中で、城内に高層建築である天守と三重塔が並立する例として摠見寺を挙げており、そこには覇者の権威誇示以外の意図が存在している可能性を示唆している¹³⁾。また、平成15年(2003)に木戸雅寿が近年の城郭研究をもとに、城郭内に寺社建築を置く例が他にも確認された

ことから、摠見寺は城郭の「要害」、つまり防御施設であったと述べている¹⁴⁾。

2-2 安土城・摠見寺再建学生設計競技

以上にみたように、摠見寺に関する研究は、安土城に付随する研究の「参照資料」程度の扱いに留まっており、復元研究に至っては安土城郭調査研究所による平面的な復元に限られている。要するに、平成20年(2008)の「安土城・摠見寺再建学生設計競技」以前に摠見寺本堂の上部構造復元はおこなわれていない。また、この設計競技における参加者の復元案は「オーソドックスな復元手法」からかけ離れたものが大半を占めていた。ここにいう「オーソドックスな復元手法」とは、

- 1) 遺構の徹底的な分析と解釈
- 2) 文献・絵図史料の精査
- 3) 類例建築データの網羅的な集成・分析と引用

の3点に集約される。この3つの作業は「復元」にあたって必要不可欠であり、特段あたらしい視点を示している



A期：移築前

礎石配置から、平安密教伝来以降に展開する「内陣礼堂造」の一類型。通常、中世の密教本堂は平屋。本堂は真言系の中世仏堂か

B期：本堂移築後

フロイス『日本史』の記載を信頼するならば、信長の時代に摠見寺本堂は二重の建物に大改修された。二重に「盆山」を安置した

C期：真言宗から臨済宗に改宗

この時点でもある程度の改修がなされた可能性があり、絵図類にみえる本堂の姿はあくまで改宗以後であると考えられる

図6 本堂の移り変わり

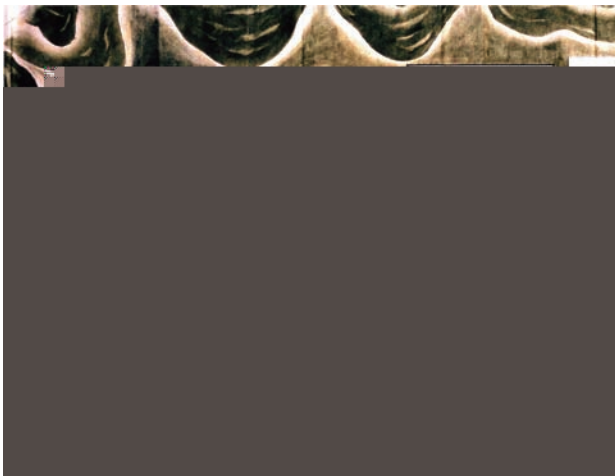


図7 「摠見寺境内絵図」

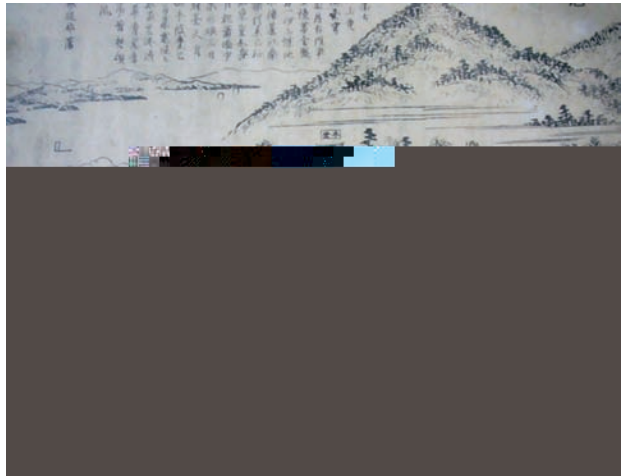


図8 「木曾路名所図会」

わけではないが、地道な作業の積み重ねこそが「復元」にとってなにより重要なことだとわたしたちは認識している。

2-3 文献・絵図史料と復元へのアプローチ

上に示した3つのアプローチのうち2)の文献・絵図史料については、資料そのものがあまり多くない。以下の5点に限られる。

- ・太田牛一『信長公記』(天正年間)

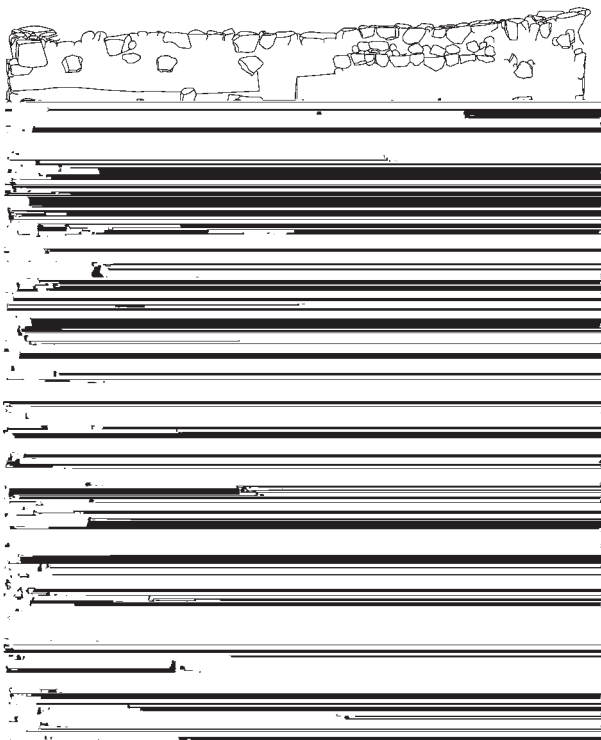


図9 摠見寺本堂遺構図(1/200)

- ・ルイス=フロイス『日本史』(天正年間)
- ・摠見寺所蔵「摠見寺境内絵図」(寛政3年)
- ・摠見寺所蔵「境内坪数並建物明細書」(寛政3年)
- ・秋里籬島「木曾路名所図会」(文化2年)

このうち本堂外観復元のモデルになりうるのが「摠見寺境内絵図」¹⁵⁾(図7)と「木曾路名所図会」(図8)に描かれた本堂である。「摠見寺境内絵図」は寸法の記載や組物の詳細などがいくつかみられ、「境内坪数並建物明細書」と複合した重要な史料である。しかしながら、これらは臨済宗に改宗以後のものであり、信長時代の本堂復元においては、あくまで二次資料として扱うべきものである。さらに、この二葉の絵図は制作年代が近いにも拘わらず、本堂の建築様式について顕著な相違がみとめられる。これについては後で詳述したい。

また、信長時代の本堂に直接関わる『信長公記』や『日本史』などの文献資料はきわめて重要な位置を占めるが、これらに記された本堂の記載はきわめて少なく、しかも厳密に言うならば、その記載が本堂の正しい姿を伝える保証があるわけでもない。よって、復元の方法としては、まず本堂跡に残された礎石などの遺構分析を第一とし、遺構から抽出したデータをもとに時代と地域が近接する類例の引用に力点を置かざるをえないであろう。

3. 遺構解釈と平面分析

3-1 本堂遺構平面の分析

当該地は、天守のある安土山頂(標高199m)から西にのびる東西尾根の頂部(標高約166.5m)に位置している。基壇は、東西約15.60m(52尺)×南北約16.20m(54尺)で、南側に石段が付き、南面および南東・南西隅部のみ切石による亀甲乱積み、西・北・東面は湖東流紋岩

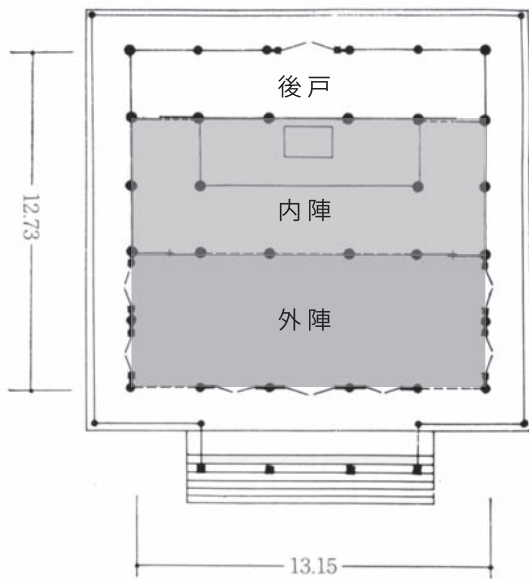


図10 長寿寺パターン

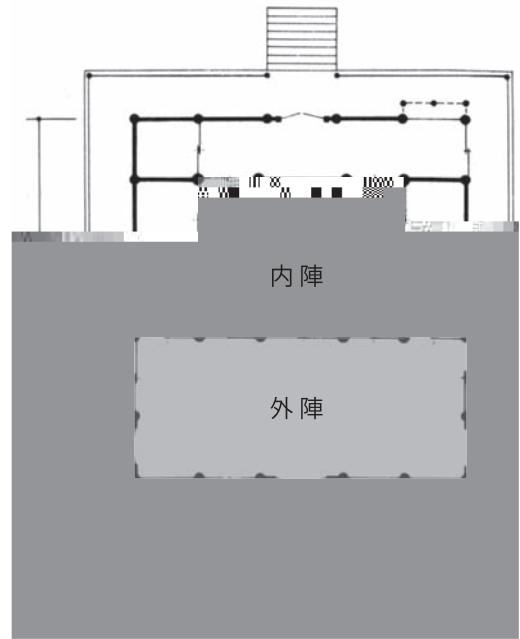


図11 新長谷寺パターン

の自然石による野面積みの化粧基壇である。

本堂の平面は礎石配置より間口5間×奥行5間に復元され、西側の北端2間分と北辺の西端3間分に縁束柱礎石が残っていることから、四面に縁を廻した方五間堂と言える。柱の礎石は約1.1m×0.7mで、南側の4基が約0.6m×0.5mと他の礎石より小型であることから床束の礎石と考えられる。従って、南側に間口5間×奥行2間の礼堂（外陣）を配し、北側に間口3間×奥行2間の内陣、その両脇に間口一間分の脇間と背後に後戸があったと推定できる。すなわち、摠見寺本堂は内陣礼堂造の中世仏堂であったことがわかる（図9）。この遺構の特徴は、後戸の柱間が1.65m（5尺5寸）ばかり短くなっており、内陣の来迎壁を後退させて後戸の空間を狭めている。他の柱間は、外陣が東西南北ともに約2.4m（8尺）、内陣が東西約2.4m（8尺）、庇が東西2.4m（8尺）である。側柱から基壇端までは約1.65m～1.80m（5尺5寸～6尺）であり、軒の出を推定できる。

平成6年（1994）の発掘調査では、建物中央部に南北トレンチを設定して深掘りしている。この結果、礎群との境に接した位置で、礎に囲まれた1.1m×1.4m以上の隅丸方形の遺構が検出された。この遺構は上面の粘土直下から掘り込まれており、約75cmの深さがある。囲みの石組は、礎を乱雑に3石ばかり積み上げたものであり、掘り込みの中央部には2つの平石が置かれているが、この下から遺物は検出されなかった。礎石は残存しているものの、大半が薄く剥離しているか赤色に変色しており、

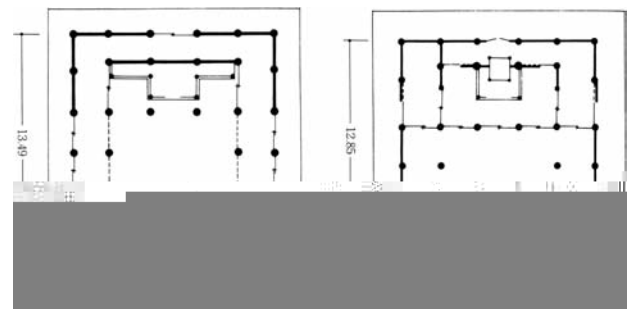


図12・13 中山寺本堂（左）温泉寺本堂（右）

8基はクラックが入っている。また、粘土上面からも焼土・炭化物・瓦碎片・釘類が多量に出土しており、嘉永7年（1854）の火災を裏付けている¹⁶⁾。

さて、以上の遺構の状況と寺伝をもとに、まずは摠見寺本堂の変遷について整理しておきたい。先に述べたように、本堂は信長が新たに建立したものではなく、他所から移築されたものであり、建立年代こそ不明であるが、本堂初重が中世仏堂であることは間違いない。また、創建時住職の亮照法印が真言宗の僧侶であったことから、移築された仏堂は真言系密教の本堂であったと考えるのが妥当であり、方五間という規模、そして中世仏堂の通例からみて、移築前の本堂は単層であったろう。しかし、フロイスの記述を信じるならば、信長は盆山を堂内諸仏の上に祀っていたわけだから、移築後の仏堂は二重と考えざるをえない。つまり、移築前の単層方五間仏堂を信長は重層に建て替えたことになる。

5寸前後(室町) 7寸前後(桃山)と変化している。桃山時代の仏堂については類例が少ないことから一様に1枝=7寸とは言い難いが、移築前の惣見寺本堂は室町時代に竣工した建物と推定されるので、本堂の1枝は5寸だったとみて、以下の考察を進める。なお、母集団となる建物は鎌倉時代から桃山時代における建物のうち、規模が五間四方で、地域が近接する建物(近畿・中部地方)を対象とした。また、度数分布をとりヒストグラムにした場合、0.50~0.59までの階級が最も多いことから、その階級のなかで遺構の各柱間と合致する数値である0.5寸を採用した。

(3) 平面の規模と枝割

惣見寺本堂の場合、遺構の礎石配列から側柱筋の柱間寸法は8尺等間に復元できる。また、「惣見寺境内絵図」や「境内坪数並建物明細書」によると、本堂の全体寸法は「梁行六間六寸・桁行六間壹尺」と記されている。ここにいう「一間」の実寸はあきらかではないけれども、仮に一間=6尺5寸とすると、本堂の全長は梁行39尺6寸・桁行40尺となって、本堂遺構(40尺四方)とほぼ一致する。ここでは、設計寸法として40尺四方を採用する。そして、類例遺構の分析によって導かれた「1枝=5寸」の単位寸法値を採用すると、柱間寸法8尺は16枝に相当し、平面全体では80枝四方と表現できる。

問題は内陣の入側柱筋であり、桁行は8尺(16枝)等間とみなせるが、梁行では以下のように変則的な割付になる¹⁷⁾。

- ・南側 8尺(16枝)
- ・北側 10尺(20枝)
- ・後戸 6尺(10枝)

この梁行方向にみられる側柱筋と入側柱筋の柱配列のみだが、中山寺本堂や温泉寺本堂と共通する特徴であり、惣見寺本堂の平面もこれらの類例と共通する平面と構造に復元すべきであろう。平面配置の考察を含め、以上より、本堂の復元平面は図14のようになる。これをもとに床上の構造を復元していく。

4. 三期の復元案

4-1 床上構造の復元

以上の平面特性から、本堂初重の架構は、基本的に平面が近似する新長谷寺本堂に倣う。以下、部位別に復元の根拠を示す。

(1) 大瓶束による真隅の構造

すでに何度も述べてきたが、惣見寺本堂遺構は内陣側の桁行方向で来迎壁の柱筋が後戸側にずれこみ、入側柱と側柱の位置が揃わない。方五間堂の多くは柱筋が揃っており、入側柱と側柱の上部を隅木でつなぎ、真隅の小屋組を造れるのだが、惣見寺本堂の場合、背面側の柱上部に隅木を載せると振隅になってしまうのである。そこで、同様の柱配列をもつ中山寺本堂などの架構をみると、入側柱筋の貫上に大瓶束を立て、束の上部で隅木を支えている。こうすることにより、真隅の小屋組が生まれ、垂木が架けやすくなる。須弥壇を置く内陣のスペースをひろげるために来迎柱を後戸側に寄せることによって生じる構造的矛盾を、大瓶束によって解消していると理解できよう。ちなみに、このような空間と構造の処理は、松尾寺本堂(奈良県大和郡山市/1337)などの方三間の小型仏堂にもみられる。

(2) 大虹梁と曇股

惣見寺本堂の礼堂(外陣)では入側柱を省略しており、内陣・外陣境の柱と南側正面の側柱を大虹梁でつなぐことにした。中世密教の諸仏堂に倣い、内外陣境側は虹梁尻を柱中間の挿肘木で受け、正面側柱側は柱上部に虹梁尻を載せる。隅木まわりについては新長谷寺本堂に倣い、

X 俛 夕 苦 見 齋 子 宣 を V こ 9 猊 聖 ム を 贈 必 捲 見 齋 子 聖 大 柳 齋



図15 A期(移築前)本堂 復元外觀パース

り大きい。同規模仏堂の類例をみると、そのほとんどが側柱の径を1尺～1尺2寸、入側柱の径を1尺4寸～1尺5寸としている。これらのデータを参考にして、摠見寺本堂の側柱径は1尺、入側柱径は1尺4寸とした。柱の形状は新長谷寺本堂に倣った。柱高については、柱高と柱間寸法の比例関係を類例仏堂から集めて平均値を求めた(表2)。平均の比率(柱高/柱間)は1.488である¹⁸⁾。摠見寺本堂の柱間寸法は8尺であり、柱高は8尺×1.488=11尺9寸とした。

(4) 軒

本堂遺構の側柱礎石心から基壇端までの距離は5尺5寸～6尺であり、軒の出は6尺に復元した。なお、雨落溝は残っていない。枝割で表現すれば、軒の出は12枝である。軒は二軒で、組物については「境内坪数並建物明細書」に記載のある出組を採用した。

4-2 A期の本堂復元

(1) 唐戸の意匠

以上の考察により、本堂初重の構造が形を成してきた。この初重はA・B・Cの3期に共通する。なにより、移

築前の本堂であるA期の仏堂そのものと言ってもよいだろう。B期・C期の外観については、時代は下るけれども「木曾路名所図会」「摠見寺境内絵図」「境内坪数並建物明細書」を参照するしか手だてがない。まずは「境内坪数並建物明細書」に記載された本堂の記載を引用しておこう。

- ・三ツ斗作 丸柱 枳形出組 正面唐戸三ヶ所
中入口明キ六尺五寸 左右同唐戸明キ五尺式寸
同正面東西二瓦洞口式個所有之候
東北之方二唐戸三個所明キ五尺式寸
尤四方五尺縁
上二桁行式間四面之枳形出組
二軒扇椽閣有之棟寄セ棟二重共屋根瓦葺
並北東之方二便所壺ヶ所 梁行壺間 桁行式間
屋根瓦葺

後半に記載された二重(2階)の記述については後に述べるとして、初重については正面に唐戸(棧唐戸)が3ヶ所あり、中央の唐戸の内法が6尺5寸で、左右の唐戸の内法は5尺2寸とやや小さい。さらに北側と東側に内法5尺2寸の唐戸が3ヶ所あるという。北側と東側にどの

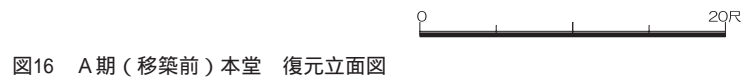


図16 A期（移築前）本堂 復元立面図

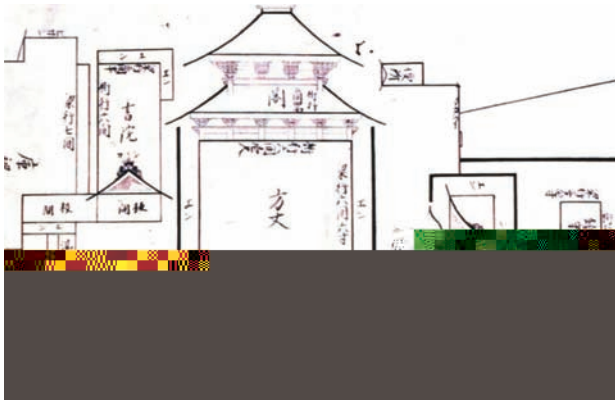


図18 「摠見寺境内絵図」(1791)に記された本堂



図19 「木曾路名所図会」(1805)に記された本堂

ように唐戸が配置されるかは不明ながら、中世仏堂の類例をみると、多くは棧唐戸を側面に2ヶ所、背面に1ヶ所設置しているのので、これに倣った。

(2) 花頭窓

「木曾路名所図会」に描かれ、「境内坪数並建物明細書」に記載された「瓦洞口」(花頭窓)は改宗以後の装飾として捉えるべきもので、必ずしも信長在世時に存在したとは限らない。しかしながら、『安土山記』¹⁹⁾によれば、安土城天守閣において信長は中国志向が顕著であり、安土城建築に「唐様」(禅宗様)を積極的に取り入れたという。こういう信長の趣味を勘案し、B期の段階から花頭窓を採用した。なお、本堂移築前のA期についても、すでに和様と禅宗様の折衷は進展しており、真言宗本堂

に花頭窓が取り入れられていたとしてもおかしくはないが、B期以降との差別化を図るため連子窓を採用した。

(3) 建具と屋根

建具等の意匠は地域の特徴を受け継いだ可能性があるともなし、長寿寺本堂および摠見寺三重塔・仁王門など近隣の類例に倣った。屋根については、類例を参照して寄棟造を採用し、構造は孝恩寺観音堂に倣った。茅葺か檜皮葺かは判断に迷ったが、周辺地域に茅葺の本堂を確認できなかったため、今回は最も近隣の類例である長寿寺本堂と同じ檜皮葺とした(図15)。

4-3 B期以降の本堂復元

(1) 異なる絵図の謎

寛政3年(1791)の「木曾路名所図会」(以下「図会」と略称)と文化2年(1805)の「摠見寺境内絵図」(以下「絵図」と略称)に描かれた本堂の表現を細かく観察すると、制作年代が近いにも拘わらず、まったく別の建物を表現したような印象をうける(図18・19)。共通点と相違点を以下に示そう。

< 共通点 >

- ・ともに二重の建物
- ・初重、二重とも瓦葺屋根
- ・初重の正面に唐戸が3ヶ所
- ・初重の両脇に花頭窓がある

< 相違点 >

- ・二重の大きさ(「図会」は小さく、「絵図」は大きい)
- ・二重の建築様式(「図会」は禅宗様、「絵図」は和様か)
- ・屋根形式(「図会」は寄棟、「絵図」は入母屋)
- ・初重縁の有無(「図会」は無、「絵図」は有)

これらに相違点の由来については、最後に考察することにして、まずは二つの画像に近づけた復元を試みる。なお、「境内坪数並建物明細書」(以下「明細書」と略称)



図20 「木曾路名所図会」をモデルとした本堂 二重復元平面図

は「図会」と複合した寛政3年(1791)の史料だが、寸法や細部様式については他に頼る史料がないため「絵図」についても採用する場合がある。

(2) 禅宗法堂風の二重仏堂

まず、秋里籬島の描いた「木曾路名所図会」(1805)からみてみよう。「図会」は摠見寺境内全域の俯瞰図で、現存する仁王門・三重塔を含む伽藍配置を知ることができる。中央には「本堂」と記された禅宗寺院法堂風の二重仏堂が描かれており、寛文8年(1668)の臨濟宗改宗との関係を想像させる。本堂二重に注目すると、中央に

扉はなく、内側に2名の人物がみえる(図19)。おそらく扉については、内部の状況を表現するために省略したのだろう。このような省略は他にもみられる。現存する三重塔と絵図のそれを比較すると、二重と三重の縁が省略されている。また、本堂初重の縁も描かれていない(遺構には縁束の礎石が残っている)。以上を踏まえ、二重の内部に「盆山」をおいた状態の復元的状況を図化した(図20)。なお、二重の縁については、類例をみる限り、二重仏堂のほとんどが縁をまわしていることから、「図会」では省略されたものと解釈した。

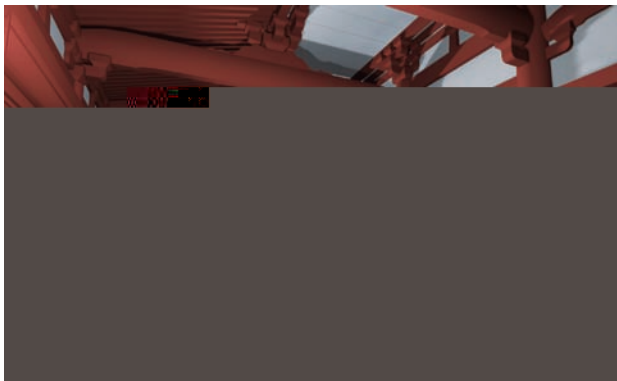


図21 初重復元内観パース 礼堂(外陣)

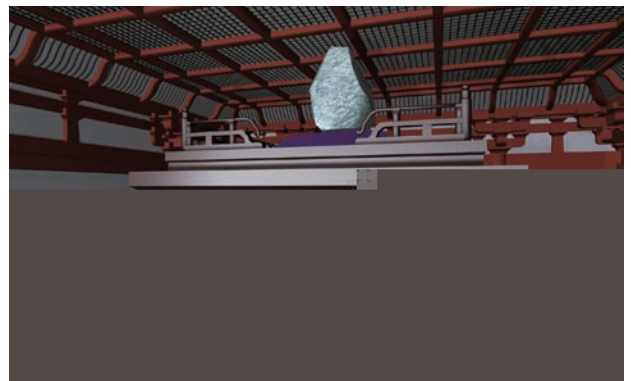


図22 二重復元内観パース 「盆山」を祀る

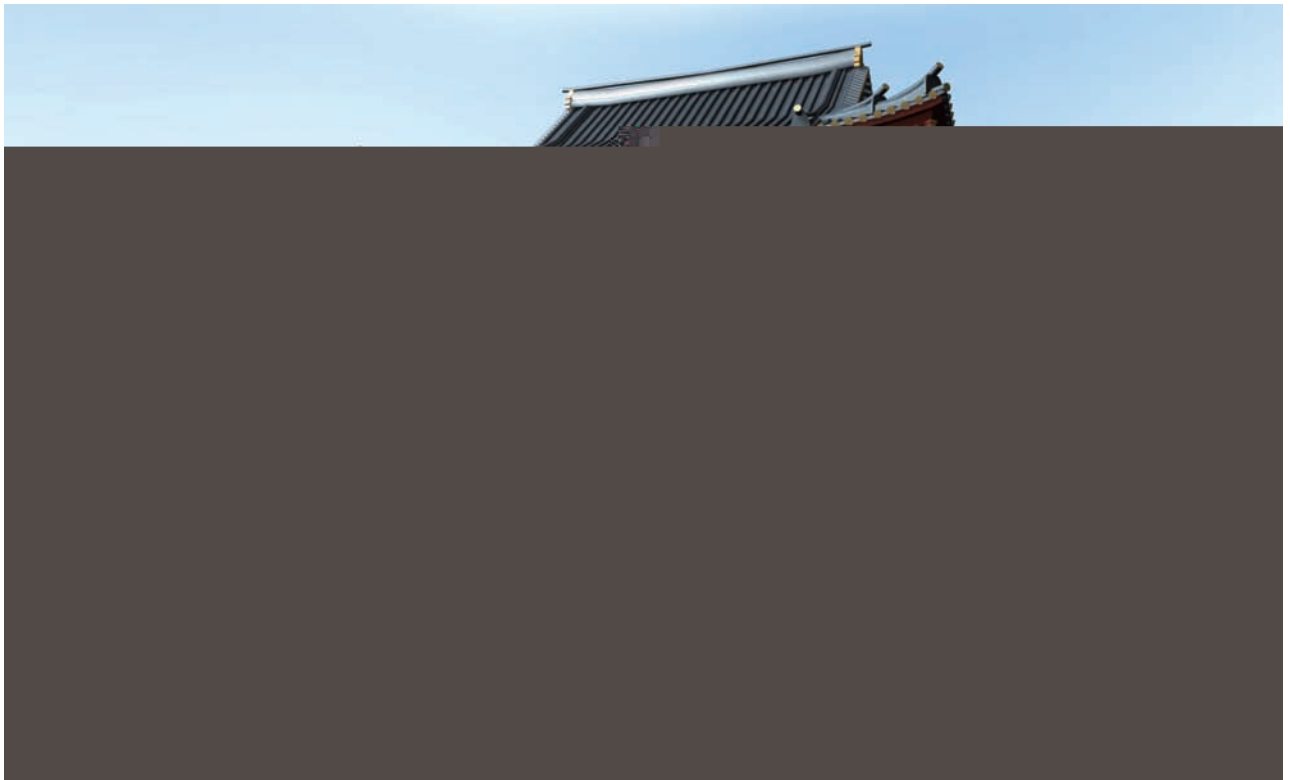


図23 「木曾路名所図会」をモデルとした本堂 復元外観パース

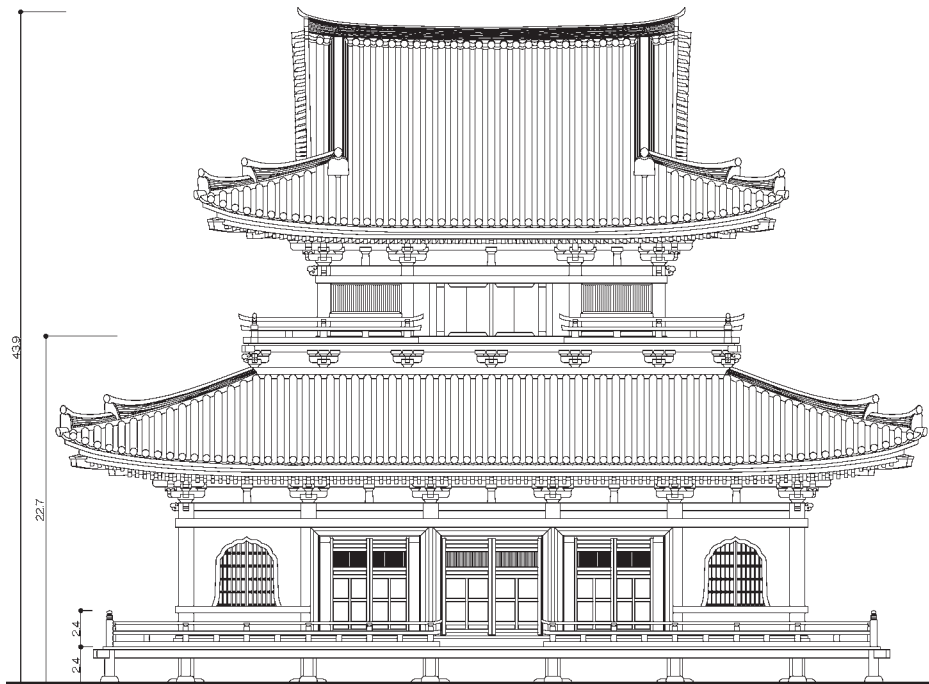


図24 「木曾路名所図会」をモデルとした本堂 復元立面図

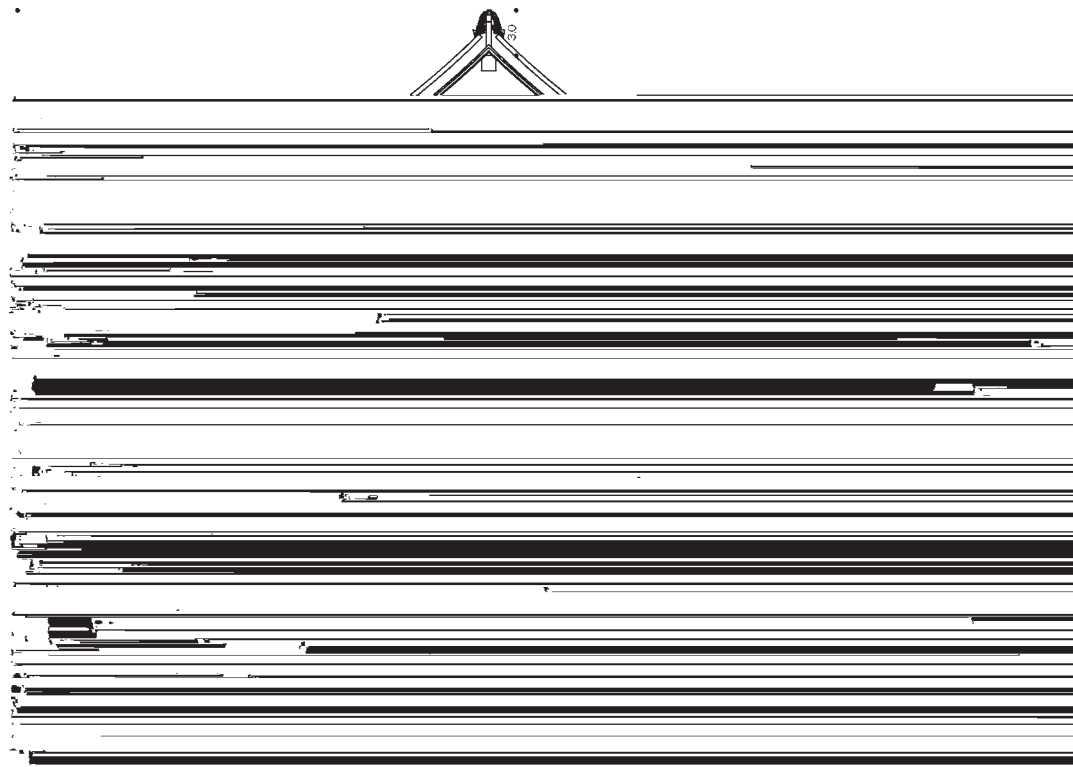


図25 「木曾路名所図会」をモデルとした本堂 復元梁行断面図

問題は二重の平面規模である。「明細書」(1791)は、二重の規模を「二間四方」と記しているが、「図会」の二重は二間四方よりもはるかに大きくみえる。また、「明細書」では屋根を寄棟と記しているのに対して、「図会」ではあきらかに入母屋造に描いている。したがって、平面規模と屋根形式は「明細書」の記載に従わないことにした。一方、集成した二重仏堂や山門などの類例をみると、二重の側柱は初重の入側柱から2枝内側に納めて立てている。「図会」の状況と比較しても、その可能性が考えられることから初重入側柱筋から「二枝落」の平面規模を採用した。復元した本堂初重入側柱筋は24尺(48枝)四方であるから、二重の平面規模は22尺(44枝)四方となる。

細部の処理については以下に整理しておく。

- (イ) 組物：「図会」からは組物を判別できないので、「明細書」記載の記述から出組を採用した。
- (ロ) 屋根：二重の屋根は「図会」の表現に従い、入母屋造本瓦葺とした。勾配・構造については相国寺法堂(京都府京都市/1605)を参照した。また、軒については絵図からは判別できないが、禅宗様法堂のほとんどは二軒扇垂木であり、「明細書」も二軒扇垂木としている。
- (ハ) 妻飾：「図会」では記されていないため判断に迷ったが、摠見寺境内の仁王門や常楽寺本堂(滋賀県湖南市/1360)などで豕叉首が妻飾に使用されていることから、これを採用した。
- (ニ) 勾欄：「図会」に初重・二重ともに縁の表現が

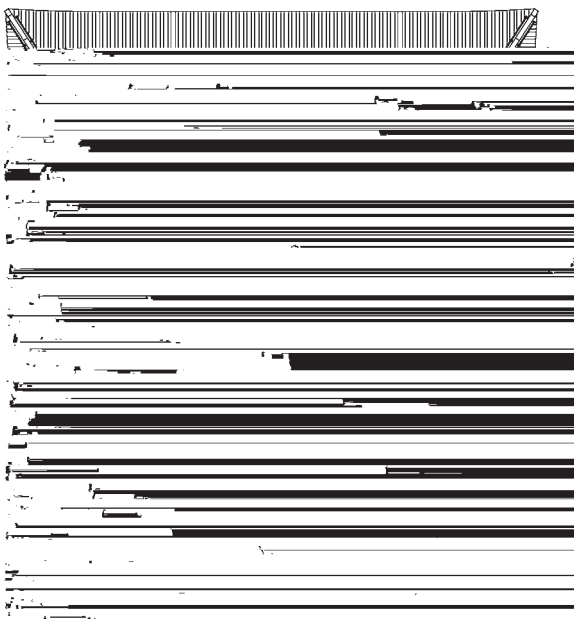


図26 「摠見寺境内絵図」をモデルとした本堂 二重復元平面図

省略されており、勾欄が跳勾欄か擬珠勾欄なのか不明である。二重仏堂の類例をみると、金峯山本寺は二重に跳勾欄がみられ、単層の諸仏堂のほとんどは擬珠勾欄を使用している。よって、復元本堂の二重には跳勾欄を、初重には擬珠勾欄を用いた。

- (ホ) 盆山の位置：遺構の発掘調査で本堂中央に深いピットが検出されており、ここになんらかの埋納品が納められていた可能性がある。この中央ピットの直上にあたる二重の中心に、盆山を安置する須弥壇風の台を設置した(図22)。

(3) 「洛中洛外図」にみる二重建物と摠見寺

一方、「摠見寺境内絵図」(1791)は「明細書」と同年の制作で、いずれも摠見寺境内建物の概要を寺社奉行に提出した資料とみられている。「絵図」「明細書」とともに二重を「二間四方」で屋根は「寄棟瓦葺」であると記している(図18)。

ここで、試みに二重の平面を復元してみよう。一間を初重同様の6尺5寸とすれば、二重の平面は13尺四方となる。「図会」から復元した二重の規模に比べてはるかに小さいことがわかるだろう。この規模は、フロイスのいう「仏龕」を彷彿とさせる。人を収容するスペースとしては狭すぎるが、「盆山」を安置するにふさわしい面積をもつ厨子のような小楼閣である(図26)。

このような小楼閣を初重の大屋根に載せた二重建築は「洛中洛外図屏風」の諸本(16~17世紀²⁰⁾)にも散見される。たとえば、諸建築を写実的に描く池田家本においては、左隻第一扇下半に望楼をもつ家をはじめ、極端に小さな楼閣を大屋根に載せた例が多数みうけられる(図27)。現存する建造物としては、東福寺開山堂(京都府東山区/1823)や本願寺飛雲閣(京都府下京区/桃山時代)などがその典型であり、これらはあたかも地上にあった建物を屋根に置いたかのような印象を受ける²¹⁾(図28・29)。また、勝興寺鼓堂(富山県高岡市/1733)のように二重に腰袴をまわした城郭風小楼閣も知られている(図30)。

二間四方の平面をもつ小楼閣は以下のように復元した。

- (イ) 「明細書」にみる二重の記載：「上二桁行式間四面之桁形出組 二軒扇椽閣有之 棟寄セ棟二重共屋根瓦葺」とあることから、出組、二軒扇垂木、瓦葺寄棟屋根を採用した。
- (ロ) 盆山の位置と屋根構造：集成した類例仏堂のうちもっとも規模が小さく、B期に年代が近い地藏峰寺本堂(和歌山県海草郡/1513)に倣った。また、「図会」による復元と同様、中央に盆山を安

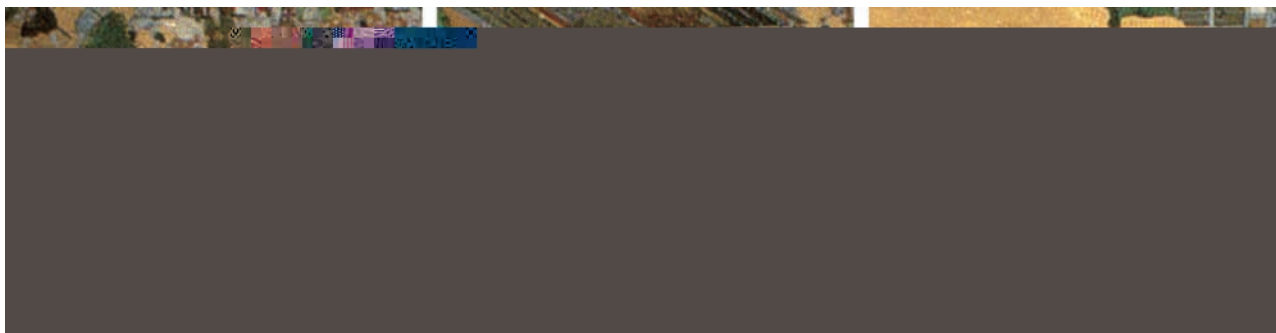


図27 「洛中洛外図屏風 池田家本」(17世紀)



図28 東福寺開山堂(京都府東山区/1823) 図29 本願寺飛雲閣(京都府下京区/桃山時代) 図30 勝興寺鼓堂(富山県高岡市/1733)

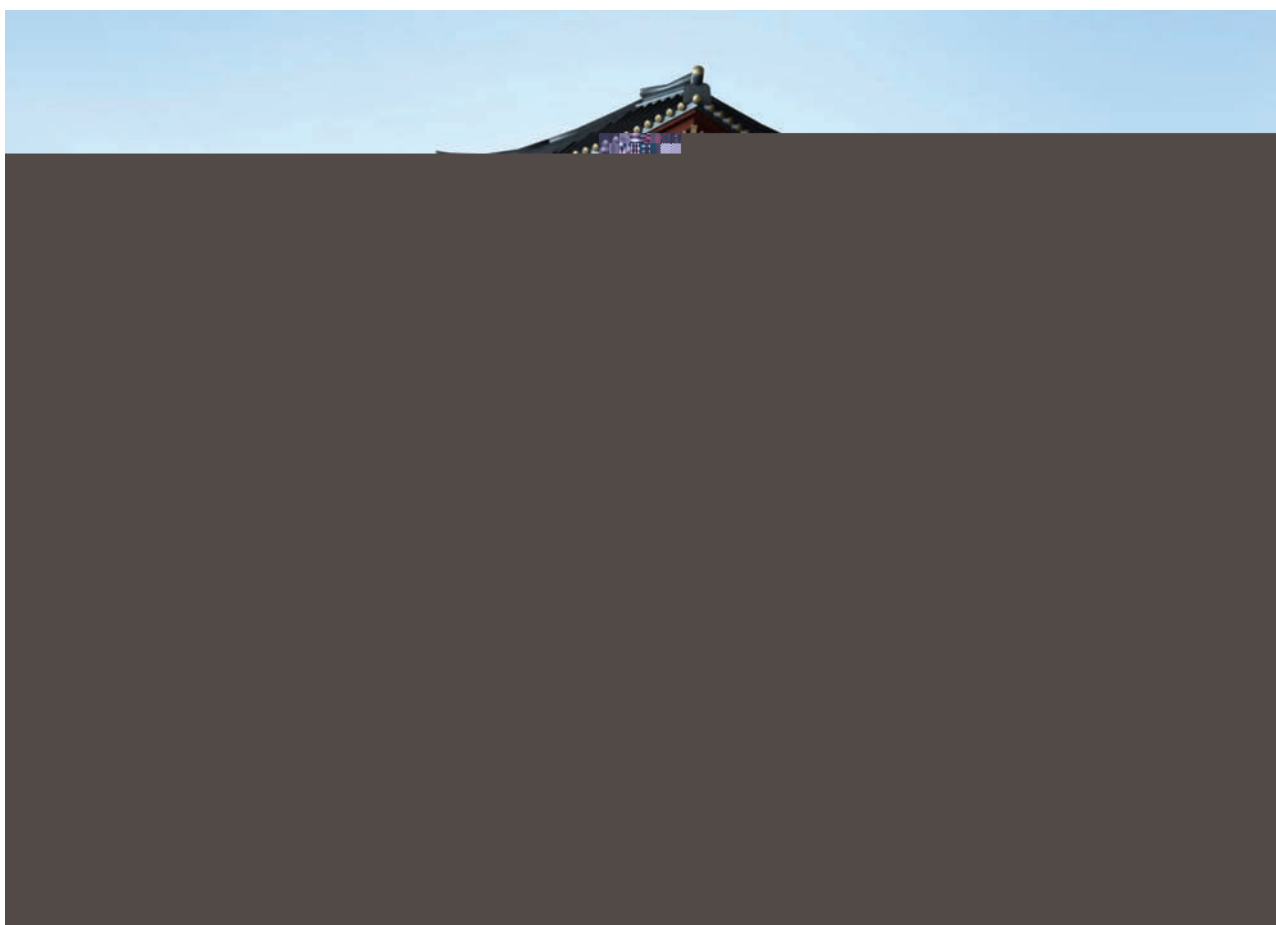
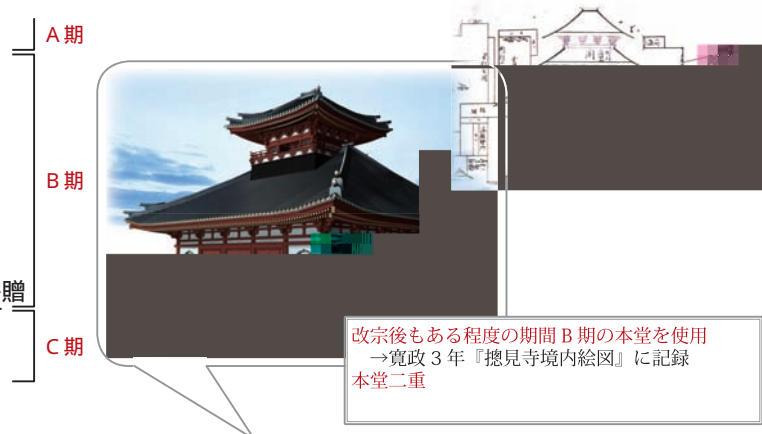


図31 「摠見寺境内絵図」をモデルとした本堂 復元外觀パース

【年表】

	~天正4年	本堂移築前
	天正4年~天正9年	摠見寺建立
	真言宗僧侶	亮照法師を迎える
	天正9年7月15日	盂蘭盆会
	天正10年1月1日	境内 能舞台見物
	6月2日	本能寺の変
	15日	安土城炎上
禅宗以前	▲慶長9年	秀頼 書院・庫裏を寄贈
▼禅宗以後	寛文8年	臨済宗に改宗
	嘉永7年11月16日	本堂など焼失



<p>A期：移築前 天正4年以前 礎石配置から「内陣礼堂造」平屋の中世密教本堂 本堂は真言系の中世仏堂</p>	<p>B期：本堂移築後 天正4年以降 信長時代に摠見寺本堂は中世仏堂の上に小型の仏堂を置く 二重に「盆山」を祀った</p>	<p>C期：臨済宗に改宗 文化2年以降 禅宗寺院の法堂に近づけるように本堂二重を改修 二重の開口部に扉をつける</p>
---	---	---

図34 復元した摠見寺本堂（A期・B期・C期）の位置づけ

置した。

- (八) 禅宗様の要素：「絵図」「明細図」に従い、初重花頭窓、台輪、詰組、全面扇垂木、粽付柱などを採用した。
- (二) 勾欄：「図会」による復元と同様の処理にした。

5. 結論

以上、長々と考察を続けてきたが、結果として3つの本堂を復元するに至った。摠見寺の歴史のなかで、この3案をどう位置づければよいのだろうか。

まず、移築前にあたるA期の本堂は基壇の礎石配置から中世仏堂に特有な内陣礼堂造の平面をもつ単層寄棟造檜皮葺に復元した。移築前と移築後で柱の位置が変わっていないという前提に立っての復元である。摠見寺の場合、伽藍の造営期間がきわめて短いことからみて、移築前後に本堂の初重を大きく改変したとは考え難く、今回の復元で大きな誤りはないだろう。

つぎに、「摠見寺境内絵図」(1791)と「木曾路名所図会」(1805)という二つの絵図に描かれた異なる様式の二重仏堂を別々に復元した。このうち、ルイス・フロイスのいう「仏龕」に近いイメージをもつのは、「絵図」に描かれた二間四方の小楼閣を大屋根に載せた復元案であり、「図会」より復元された二重仏堂は禅宗寺院の法堂を思わせる大きな2階をもち、その内部には人物が2名描かれていた。以上の表現とイメージの差異から判断して、わたしたちは「摠見寺境内絵図」に描かれた本堂こそが信長在世時代のB期、「木曾路名所図会」に描かれた法堂風の仏堂は臨済宗改宗以後のC期の姿を示すものと考えている。

問題は年代である。摠見寺が臨済宗に改宗するのは寛文8年(1668)のことであり、「摠見寺境内絵図」(1791)に描かれた本堂は改宗後123年を経た時代の姿を示すものである。

この時間差を埋める資料がないわけではない。摠見寺

文書によると、「摠見寺境内絵図」が制作された寛政3年(1791)の十年前、天明元年(1781)に信長の二百回忌がおこなわれている(表1)。信長の二百回忌法要については比較的史料が多く残っており、「摠見寺殿二百年遠忌修行之記(天明元年)には、法要が閏五月二十九日から六月二日の三日間にかけておこなわれ、妙心寺の僧侶をはじめ、織田家から多くの参詣者を招いた盛大なものであったことが記されている²²⁾。

この法要は「摠見寺境内絵図」に描かれた本堂を舞台におこなわれたものであろう。その建物は信長が自ら移築・改修した建物であった、とひとまず仮定して、文化4年(1805)の「木曾路名所図会」に飛ぶ。文化年間になって、摠見寺の本堂は禅宗寺院らしい法堂風の姿に変わっている。このような改修は、むしろ真言宗から臨済宗への改宗時になされたのではないかという反論もあるかもしれない。しかし、そう仮定してしまうならば、「摠見寺境内絵図」と「木曾路名所図会」はほぼ同じ外観に描かれていなければならないはずである。両方の絵図をみる限り、とりわけ二重の規模と屋根形式は大きく異なっており、改宗・改築同時の仮定では絵図にあらわれた建物表現の差異について説明できない。

以上、「仮定」を連続して述べてきたが、ここでわたしたちは自らの仮説を整理しておく必要がある。

信長が安土城近隣の寺院から移築してきた本堂(A期)は、摠見寺境内の最も高い場所に基壇を築いて2階建の本堂に大改修された。その本堂はA期の仏堂の大屋根の上に小さな楼閣を載せて、そのなかに信長の化身たる「盆山」を安置していた(B期の始まり)。天正10年(1582)の「本能寺の変」の後まもなく安土城天主は炎上落城したが、摠見寺は類焼を免れ、信長の菩提寺として存続し、本堂もそのまま使い続けられた(盆山を2階に祀っていたかどうかは不明)。その本堂は、寛文8年(1668)の臨済宗改宗以後、すなわちC期になっても使われており、天明元年(1781)に信長の二百回忌もまたここでおこなわれた。

二百回忌の際、あるいは二百回忌の直後から、老朽化した本堂の改修話もちあがった可能性がある。当時、摠見寺は臨済宗の寺なのだから、「本堂」と呼ばれる施設は不要であり、禅宗伽藍の中心施設として「仏殿」が必要だったはずである。「本堂」の規模を踏襲して、方五間の「仏殿」に建て替えようというアイデアが提案された可能性もあるが、方五間の仏殿は五山格の禅寺にしか許されない規模である。方五間の仏殿を新築するのは不可能であるから、当初の初重平面規模を維持しようとするならば、2階の規模を大きくする「改修」案が得策

であり、本堂を「法堂」風の二重建築に改修することで禅寺としての風格を誇示できると考えたのではないだろうか。そういう考えのもとに生まれたのが「木曾路名所図会」(1805)に描かれた本堂だろう、とわたしたちは推定している。

すなわち、B期の本堂は信長の在世時に出発し、信長の二百回忌法要(1781)の舞台となるばかりか、さらに十年ばかり存続して「摠見寺境内絵図」(1791)に描かれたものの、その後から改修工事が進み、2階を拡大して法堂風の外観を獲得した。その大改修後の姿が「木曾路名所図会」(1805)に描かれたのではないか。

このたび復元した3つの本堂の歴史的な位置づけを、推定の域を出ないものではあるけれども、わたしたちは上のよう考えている。

謝辞

本稿の作成にあたり、近藤滋(安土城郭調査担当参事員)、佐々木孝文(鳥取市教育委員会文化財課)両氏には多くの資料と情報をご提供いただきました。英文要旨の作成にあたっては、ベゴールベッティーナ(本学准教授)、横山里砂(本学非常勤講師)両先生にご指導いただきました。また、復元模型制作には、浅川研究室の6期生、7期生に全面的に協力していただき、6期生の森吉宏君にはCG制作で大変お世話になりました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

注

- 1) 太田牛一、榊山潤訳『原本現代訳20信長公記(下)』ニュートンプレス、1980:p.223。
- 2) じつは、信長創建時の住職は明確でない。「安土山摠見寺旧写記」(1912)によれば、信長安土在城時代の住職は亮照法印なる人物で、信長が小牧在城時代に屋敷を拝領し、その後信長に伴って安土へ移ったという。一方、江戸時代の「摠見寺由緒」は、初代住職を正仲剛可としている。しかしながら、正仲剛可は秀吉時代の人物であり、信長時代の住職ではないことが滋賀県教育委員会『特別史跡安土城跡発掘調査報告書』6(1996:p.5)であきらかとなっている。これに従い、亮照法印を信長創建時の住職とした。
- 3) ルイス・フロイス(松田毅一・川崎桃太訳)『完訳フロイス日本史3織田信長編』中公文庫、2000:p.136。
- 4) 太田牛一(榊山潤訳)『原本現代訳20信長公記(下)』ニュートンプレス、1980:p.244。

- 5) ルイス・フロイス(松田毅一・川崎桃太訳)『完訳フロイス日本史3 織田信長編』中公文庫、2000 : p. 134-135。
- 6) 滋賀県教育委員会『特別史跡安土城跡発掘調査報告書』6(1996 : p. 88) 所載の第3表に「境内坪数並建物明細書」記載の規模・寸法・由緒が整理されており、これに従った。
- 7) 滋賀県教育委員会『特別史跡安土城跡発掘調査報告書』6、1996。同『特別史跡安土城跡発掘調査報告書』、2008。
- 8) 滋賀県『滋賀県史蹟調査報告書第十一冊安土城址』、1942。
- 9) 内藤昌『復元 安土城』講談社、2006 : p. 298-311。
- 10) 宮上茂隆『復元模型安土城』草思社、1995 : p. 26-35。
- 11) 秋田裕毅『織田信長と安土城』創元社、1990 : p. 187-217。同『神になった信長』小学館、1992 : p. 45-70。
- 12) 滋賀県安土城郭調査研究所『平成11年度秋季特別展 安土城・1999特別史跡安土城跡発掘調査10周年成果展』滋賀県立安土城考古学博物館、1999。同『安土城・信長の夢』サンライズ、2004 : p. 42-50。
- 13) 松岡利郎「城郭内の宗教施設に関する一考察」『城郭研究会』第16号、中世城郭研究会、2002。
- 14) 木戸雅寿『よみがえる安土城』吉川弘文館、2003 : p. 58-65。
- 15) 注12) 前掲書(滋賀県立安土城考古学博物館) 1999 : p. 53
- 16) 注7) 前掲書
- 17) 注7) 前掲書に記載される復元柱間寸法は、内陣奥行2間を9尺2寸5分等間、後戸奥行1間を5尺5寸としている。今回は類例から得た枝割と遺構を照らし合わせ、独自の復元柱間寸法を設定した。
- 18) 集成した類例のうち、同規模である方五間単層の仏堂を対象とした。ただし、極端に比率が異なるもの(孝恩寺観音堂、善福寺釈迦堂、地藏院本堂)は除外した。
- 19) 『安土山記』の著者南化玄興は、安土城の特徴が「唐様」にあり、その新機軸は信長の構想になると記している。
- 20) 狩野永徳作の上杉家本はあまりにも有名であるが、その作品の中に対象となる二重建物はみられないことから、対象物が多く描かれている池田家本を例にあげた。なお、池田家本の画家および制作年代は不明だが、町並みの風俗描写が豊富であることや、右

隻右上端に描かれた伏見城が他の諸本よりも写実的で、左隻左下端に元和3年に焼失したとされる西本願寺が正確に描かれていることから、慶長末～元和の制作と考えられている(奥平俊六『新編名宝日本の美術第25巻洛中洛外図と南蛮屏風』小学館、1991 : p. 54-55、p. 95-96)

- 21) 浅川滋男「飛雲閣のかたち - 不釣り合いな意匠の謎 - 」人環フォーラム4号、1998 : p. 22-25。
- 22) 注12) 前掲書(滋賀県立安土城考古学博物館) 1999 : p. 55。

参考文献(注に示した論著は除く)

- 秋里籬島(1805)「木曾路名所図会」
 太田博太郎・関口欣也(1975)『日本建築史基礎資料集成7 仏堂IV』中央公論美術出版
 京都府教育委員会(1971)『重要文化財大徳寺山門(三門 修理工事報告書』、同(1976)『重要文化財妙心寺法堂・経蔵修理工事報告書』、同(1982)『重要文化財南禅寺三門並びに勅使門修理工事報告書』、同(1982)『重要文化財大徳寺経蔵及び法堂・本堂(仏殿)修理工事報告書』、同(1992)『重要文化財知恩院三門修理工事報告書』、同(1997)『重要文化財相国寺本堂(法堂)・附玄閣廊修理工事報告書』
 滋賀県教育委員会(1957)『重要文化財長寿寺弁天堂修理工事報告 附：長寿寺本堂』、同(1959)『重要文化財円光寺本堂修理工事報告書』、同(1975)『重要文化財長命寺護摩堂・鐘楼修理工事報告書』
 重要文化財温泉寺本堂修理委員会(1970)『重要文化財温泉寺本堂修理工事報告書』
 重要文化財新長谷寺本堂修理委員会(1953)『重要文化財新長谷寺本堂修理工事報告書』
 重要文化財地藏院本堂修理委員会(1956)『重要文化財地藏院本堂修理工事報告書』
 重要文化財中山寺本堂修理委員会(1965)『重要文化財中山寺本堂修理工事報告書』
 摠見寺所蔵(1791)「摠見寺境内絵図」、同(1781)「摠見寺殿二百年遠忌修行之記」
 奈良県教育委員会(1955)『重要文化財松尾寺本堂修理工事報告書』、同(1957)『重要文化財正蓮寺大日堂修理工事報告書』、同(1984)『国宝金峯山寺本堂修理工事報告書』
 奈良県文化財保存事務(1988)『重要文化財宝幢寺本堂修理工事報告書』
 文化財建造物保存技術協会(1995)『重要文化財明鏡寺観音堂修理工事報告書』

文化庁(2000)『国宝・重要文化財大全11 建造物(上巻)』
毎日新聞社、同(2000)『国宝・重要文化財大全12
建造物(下巻)』毎日新聞社
和歌山県文化財研究会(1972)『国宝長保寺本堂修理工
事報告書』、同(1974)『国宝善福院釈迦堂修理工事
報告書』、同(1978)『重要文化財地蔵峰寺本堂修理
工事報告書』
和歌山県文化財センター(1996)『重要文化財長樂寺仏
殿修理工事報告書』、同(1998)『重要文化財雨錫寺
阿弥陀堂修理工事報告書』

図版引用一覧

図3、9 滋賀県教育委員会(1996)『特別史跡安土城

跡発掘調査報告書6』をリライト。

図7、8 滋賀県安土城郭調査研究所(1999)『平成11
年度秋季特別展安土城・1999特別史跡安土城跡発掘
調査10周年成果展』滋賀県立安土城考古学博物館か
ら転載。

図27 奥平俊六(1991)『新編 名宝日本の美術 第25
巻 洛中洛外図と南蛮屏風』小学館から転載。

図28、29、30 文化庁(2000)『国宝・重要文化財大全
11建造物上巻』毎日新聞社、同(2000)『国宝・重
要文化財大全12建造物(下巻)』毎日新聞社から転載。

(受付日2010年1月27日 受理日2010年4月8日)